

LSTR 3Mix-MP 治療に必要な「密封・密閉・閉鎖」

星野 悦郎 HOSHINO Etsuro

LSTR 療法学会 会長

LSTR 3Mix-MP 治療を実践している会員でも、その治療途上、3Mix-MP 治療が上手くいっているのか不安になることがあると思われる。患歯の現症（症状）をよく認識しさえすれば、3Mix-MP 治療によってその症状が「軽減・消失」する、という判断基準によって上手くいっている、と判断出来る。

下図に 3Mix-MP 治療の基本となる 6 つの概略的な手技を示した。適切に貼薬され、密封されれば、患歯の症状は確実に「軽減・消失」する。短期的には、3Mix-MP の治療効果が得られていると判断して良い。

3Mix-MP 治療の基本手技

1. 使用薬剤の使用期限の遵守、錠剤の保存法
2. 個々の薬剤の粉末化と保存法
3. 3Mix-MP としての調薬と当日の使い切り
4. 貼薬
5. 貼薬の密封
6. 窩洞の密閉・閉鎖と、充填、歯冠修復

手技 1~3 を適切に実施することは容易

ここで留意すべきことは「適切に」という部分で、適切な手技に関しては、繰り返し情報提供すると共に、新刊書にも詳述した。机上の準備である 1~3 を確実に行う事は特に難しいことはなく、きちんと守りさえすればこの部分での不備を不安の思うことはない。ただし、LSTR 3Mix-MP 治療新来者にとっては、成功への必須手技の第一段階で、残りの手技も含めて新刊書を熟読してほしい。

手技 4~6 は症例ごとに異なる「治療現場」の状況によって考慮

3Mix-MP 治療の治療成果に不安が残るとすれば、症例毎に現場の状況が異なる 4~6 の手技が適切にできたかどうかの不安と思われる。ニエットキャリアーを用いれば目的の箇所確実に貼薬できるようになり、GI シリンジの使用で貼薬した 3Mix-MP を押し出してしまうことなく密封できるようになった思われ、それゆえ、適切に「貼薬できた」「密封できた」なら、即時的に症状

が「軽減・消失」するので、これをもって治療効果を確認できる。

治療効果は、即時（遅くとも数日内）の症状の「軽減・消失」で判断

3Mix-MP の浸透には時間が掛かることがある

治療後遅くとも数日中に、術者として、現症状の「消失／極めて軽減」が認識できない場合、次の2点をチェックする。

1：「根管系：歯髄腔とこれに連結している象牙細管などの空間の総称」が石灰化物で密に詰まっていて薬剤の浸透に時間が掛かっている場合がある；細菌性炎症症状の可能性の高い歯既往症例（再発、再治療例を含む）の場合で、硝子様 X 線像を示す過石灰化歯根象牙質症例、根管壁の石灰沈着による根管狭窄症例、あるいは、極めて密に根充された症例などでは、浸透の役を果たす P を多めにする（新刊本 p.80：P の割合を増やした軟調 3Mix-MP の利用：紙球などに多めにまぶして髄室底に置き、その上から GI で密封、または、通常より多めの貼薬量を用いる：手法は同じ）。ただし、密に根充されているように見えてもほとんどの場合、根充物と根管壁との間には多くの隙間があり、容易に浸透するのが通常である。

なお、再治療時に歯冠部に歯折（破折線、亀裂線）のないことを確認すると良い。

症状の軽減傾向が見られたら充填・歯冠修復に進む。

根尖孔への浸透を考えると、貼薬が、象牙細管に密着していること（象牙細管經由根尖孔、歯根膜）、あるいは根管根充物（築層物を含む）に密着していること（填塞セメント類周辺經由根尖孔、歯根膜）が浸透に必須で、宙ぶらりん貼薬（貼薬窩洞側壁にこすりつけている状態）では浸透しない。

もう一点、細菌性の症状の消失後の残る症状への対処

2：軽減・消失しない症状が咬合痛・冷水痛である場合：細菌性の症状（歯肉の発赤や腫脹、膿瘍／瘻孔形成など）が軽減・消失しても慢性的な不適切な噛み合いがあると咬合痛や冷水痛が残ることがある。噛み合いのチェックと精密調整に進む。また、歯周疾患があると歯肉の感受性のため冷水痛としてクレームがある。歯肉のマッサージによって血行をよくすると歯肉の消炎と共に冷水痛も消退することが多い。

3：腫脹、膿瘍／瘻孔形成などの歯既往歯に見られる細菌性の症状がなく、咬合痛や違和感などが主訴の場合、3Mix-MP 治療が継発するかもしれない細菌性症状の発現予防として働くとしても、現症の症状の改善の適応ではない。主訴に関連する別の病因があるので診査／判断する。特に歯列全体としての不適切な噛み合わせのチェック、あるいは主訴患歯とは別の歯についての診断を試みる、また、主訴や患歯の特定が揺れ動いていないかチェックする。発熱などの体調、生理的な貧血時、あるいは不安などの精神的不安定時など、口腔内を含め、粘膜や皮膚の腫れっぼさ、痒みなどの感覚、あるいは痛み等を感じることがある。

すなわち、歯の治療の主訴のほとんどが細菌性症状なので、これが軽減・消失したを目印に 3Mix-MP 治療効果の確認と、次に進むべきステップを判断する事ができる。症状が完治しない場

合は、3Mix-MP の浸透を図る処置の上で経過を観察し、細菌性の症状が消失しても残る咬合痛や冷水痛については細菌性以外の病因を探る。

3Mix-MP 治療後、異常なく経過し、数ヶ月以上経過してから症状が惹起

特に歯冠構造の損壊の大きかった症例

厄介なことは、症状が消失してから（したがって、3Mix-MP 治療が有効であった）数ヶ月～数年後に同様な症状や違和感を主訴に再来される場合で、その原因は修復物周辺からの「漏洩」で（色素浸透試験で検知できる）、「密封・密閉」に留意した再治療・再修復が必要となる。3Mix-MP 治療の特質である「できるだけ歯を削らない／歯質を残す」を実践していると、貼薬部の周辺には歯質が残っているので、この部に GI をしっかり密着させれば、また、接着性レジンセメントを利用することで、「密封・密閉」はそう難しいものではないが、貼薬部の周辺に歯質が欠損していると（無壁性、例えば歯冠構造の崩壊歯など）、永続性のあるしっかりとした「密封・密閉」のために特別な工夫が必要となる。要は、できるだけ広く確保する貼薬部の周辺の歯質の上に接着性の高い材料で壁を作り（有壁性とする）、さらに必要なら、閉鎖性の高い直接法レジンインレーと同様に作製した「閉栓」で貼薬部を遮蔽すると共に、修復内部を補強する。その 1 例について、共同演者の見出が詳しく述べる。

纏め

本項では、3Mix-MP 療法の臨床手技を確実に、過不足なく実施することで、細菌性症状の「軽減・消失」を目印にその効果を確認できること、また、（細菌性の症状の消失後にも残る）細菌性以外の病因による症状の対処が明瞭になることを示した。

3Mix-MP 療法の臨床手技の中で、症例ごとにその状況が異なる貼薬部位周辺の歯質の損壊程度に応じて「密封・密閉」の工夫を図ることで、順調な 3Mix-MP 治療後の経過観察を行えることを説明した。